PCI フェローコースで与えられた課題は Marco Costa 氏の講演の内容に関してレポートを提出であった。
15 分という限られた時間の中で Cypher STENT(Sirolimus Elluting STENT)という、STENT 治療の弱点であった、再狭窄を抑制する Device について講演された。
まず一般的な Sirolimus という薬剤の作用機序から、STENT へのポリマーコートなど、製品に関する説明から講演は開始された。
次に Sirolimus Elluting STENT によるこれまでの臨床試験の結果からの講演をされたが、時間的な制約もあり様々なテーマのうちから長期予後と糖尿病症例に関して重点的に講演をされた。
長期予後に関してはサイファーステントの最初の臨床試験である FIM から５年がすぎており、RAVEL SIRIUS などからの長期予後に関する結果を紹介された。
BMS と比べて当然ながら心血管イベントとしての TLR がやはり低率であり、その効果が持続する可能性を言われていた。
印象的であったことは FIM 試験の長期経過症例で、２例の追跡造影結果を提示されたが、ステント留置部位には全く造影上の再狭窄を認めず、五年以上の臨床効果がこれらの症例には認められたことになる。
遅発性ステント血栓症に対する考察では、DES といえども BMS と比較して特にその発生率が変わらないと強調されていた。
国内では BMS v.s. DES の議論では late thrombosis の危険が強調され、この優れた Device を否定することには疑問を感じていた。
もちろんチクロピジンの side effect の問題や、抗血小板薬が比較的短期間で中止を必要とする症例などには、その都度 BMS や CABG などの strategy を考慮することは重要であるが、DES のすぐれた臨床成績を考慮すれば、私自身の意見としては DES の primary STENT の方針が優れているのではと受け止めていたが、今回の講演で一つ根拠を得たと思う。
糖尿病症例においても DES はその強い効果を示している事を講演された。
このカテゴリーの検討に関し、虚血性心疾患における糖尿病罹患率は欧米人と比べ日本人は非常に高いこともあり、重要なテーマと考えられる。
ただ、日本人においては虚血性心疾患における糖尿病の意義が欧米人とは若干異なるのではと個人的には考えており、当然優れた再狭窄抑制効果による心事故の回避は予想されるが、真の日本人における結果を今後検討していく重要性を認識させられた。